
こうして彼女はとらば一ゆに至った

ひろにか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こうして彼女はとらばーゆに至った

【Nコード】

N88140

【作者名】

ひろにか

【あらすじ】

メインのキャラは、スガタメ・タイガー。本編4話『ワコの歌声』で話の展開が分岐するパラレルのギャグ話。ゼロ時間内の幻の島での戦闘で倒れた銀河美少年。それにより、綺羅星十字団に新たなリーダーが誕生する。それが、一人の少女を巻き込んだ悲劇の始まりだった。・・・たとえば、喜劇にしか見えなかったとしても。(追記：3話完結のつもりでしたが、続きを書くことにしたので『連載中』に戻しました)

前編：保健室の悪夢（前書き）

ひたすら馬鹿馬鹿しくて、無駄に長いお話です。4話視聴後に書いた話なので、タイガーさんのキャラが微妙につかめてません。でも、普通の精神状態の彼女ではないということ（笑）。（追記：本編の展開に沿ってタイガーさんとケイトさんを知り合いに修正しました）

前編・保健室の悪夢

メイプルシロップのような甘い香りと、懐かしい記憶。だんだん薄まっていく現実感。自分自身が遠くなっていくような、今まで感じたことのない不思議な心地。

なのにちっとも不安じゃなかった。こんなにも心が穏やかだなんて、自分でも信じられない。

(こんな時なのに・・・)

近くにいるのは敵だけ。自分には味方もおらず、たった一人。負けたら明日は無い。

それがわかっていているのに、心は安らいでいるのだ。どうしてなのだろう、という真つ当なはずの問いさえ、無駄だと笑いたくなる。

暖かくて心地好い今を堪能していると、聞いた覚えのある声が、耳の奥で低く木霊する。

「貴女の銀河には、どんな綺羅星が眠っているのかな」

そう言った声は、女の人のもの。

そうなのかな？ わたしなんかそんな物あるの？

きつと普段なら、そう疑ったことだろう。

けれど今この時は、抵抗無く信じられた。その甘美な言葉は、すうっと体内に染み渡っていく。

身体がさらに軽くなった。今なら空だって飛べるかもしれない。うれしくなっていると、またどこから声が響いてきた。

「ほら、見てごらん。君の幸せを邪魔する者たちがいるよ？」

今度の声は、男の人。

誘われるように、ゆっくり歩を進める。その先で、敵はがくりと膝を付いた。

こんなことはいけないと、誰かが叫んでいる気がする。けれど、身体は自然とそう動く。まるで、脳と肉体が切り離されてしまったかのような。

非現実になんかいるような、曖昧になっている感覚のせいだろうか。

(まるで、宇宙に浮かんでいるみたい)

実際にそんな場所に行ったことはないのだけれど、そんなことを思う。

だって。

足の裏に地面が当たっていないみたいなのだ。

両脚に自分の身体の重みを感じないのだ。

何もかもがふわふわしていて感触がおぼろ。触れようとすると、手がすり抜けてしまいそう。

そっか、そうなんだ。

(これは、夢)

なら、何をしたらって良いんだ。

すつきりした心持ちで、腕を振り下ろす。

美しい純白のボディが、与えられた衝撃に醜くひしゃげ、砕ける。けれど、それに快感を覚えた。辺りに響きわたる破壊音は、まるで祝福の鐘の音。

5

「……………クトくん、しっかり……………て！ タ……………」

崩壊の音の合間を縫って聞こえてくる、よく知る少女の悲鳴。

なのに、心はこれっぽっちも痛まない。

(わたしは、今までずっと痛い思いをしてきたの。あなただって、少しくらい痛い思いをしたって良いじゃない)

ずっと閉じ込められてきた想いは、ようやく解放されたとはかりに荒々しく猛りくるう。

細身のサイバディが、轟音とともに大地に倒れ伏し、その動きを完全に停止する。

完全に『彼女』の勝利だった。

こうして彼女はとらばーゆに至った

目覚めた少女には、自分の置かれた状況がわからなかった。

寝起きのぼんやりした感覚が残りつつも、とりあえず身を起こす。

ショートカットに眼鏡の彼女の名は、スタガメ・タイガー。ごくごく普通・・・とは言い難い少女だ。

なにせ、女子高生でありながら学外ではメイドさん（しかもケモノ耳付き）で、しかも仮面の秘密組織と戦っていたりするのだ。むしろ『普通』とはおそろしく縁遠い女の子と言えよう。名前もはっきり言っておりえない。

そんな背景はともかくとして、彼女の記憶は、部活動を終えて教室を出たあたりで曖昧になっている。

寝た覚えなんてないのに、何故か自分はベッドに横になっていた。

「・・・」

思わず疑問が口をつく。

誰に向けたわけでもない問いに、「保健室」と予期せぬ答えが返された。

声の聞こえた方を見ると、ベッドサイドに置かれた椅子に少女がひとり腰かけていた。真っ直ぐな長髪を後ろで縛って、眼鏡をかけている。

タイガーは、その少女を知っていた。

名前はニチ・ケイト。隣のクラスの委員長。主の幼馴染。それに

思考をあえてそこで止めた。

それなりに付き合いがあるが故、思い出すことは多々はあるが、とりあえず今は必要の無い事柄だろう。

(今年は、スガタ坊っちゃんと同じクラスでしたっけ……)

ここでの会話に必要な情報は、そのあたりだ。

自分達は学生で、ここは学校なのだから。

タイガーがそんなことをぼんやり考えている間に、ケイトはベッドをひとつひとつ区切るカーテンに手をかけた。

自分站了起来ことを、保険の先生に知らせるのだろう。

そんな風に考えていたタイガーは、カーテンが開け放たれたことで露になった光景に、愕然とした。

ニチ・ケイトの言う通り、そこは確かに保健室だった。けれど、その場所に似つかわしくないものがあつたのだ。

狭い室内をびつちり埋めつくすそれは、仮面の一団。

その名は、綺羅星十字団。

彼らが大結集していたのだ。この、小さな保険室に。

「ひいひいひいひいっ?!」

これで驚くなという方が無理な話。タイガーもその例に漏れず、盛大に仰け反った。

視覚的な威力が過剰・・・というか、本能的に恐すぎる。心臓の悪い人には見せない方が賢明な、致死量を凌駕するインパクトだ。

そんな悪夢に勝るとも劣らない光景が、タイガーの前に展開されていた。

(何コレ何コレ何コレっ! どうなってるのコレっ?!)

衝撃のせいか声が出ない。タイガーは、金魚のように口をパクパクさせた。視線は一ヶ所に定まらず、せわしなく動く。

ひとしきり眼球を動かしたところで、タイガーはようやく自分を取り戻してきた。現状を認識すべく、必死に思考を巡らせる。

そして、ひとつの結論に至った。

(ああ、そういうこと)

付けたまま寝かされていた眼鏡を静かに外し、ポケットからハンカチを出してレンズを磨いてからかけ直す。

心を落ち着けてから、再び視界を見渡してみたところ。変わらず、仮面人間まみれの保健室だった。

(眼鏡が曇ってたせいじゃないっ?!)

流石にそれは苦しいのではなからうか。

確かに、現実を受け入れがたい気持ちにもなるだろう・・・というか、むしろ常識的に考えると幻覚とか見間違いといった方に分があるかもしれないが。

9

(いや、こんなところに綺羅星十字団が何の目的で来るっていうの？ あり得ないじゃない！ これはイタズラよ！ 演劇部の準部員を集めて衣装を着せたに違いないわ！)

・・・それは皆に拒否されると思われる。

やはり無理が有る推測だが、タイガーはその仮説に縋りたかった。そんな彼女をよそに、何の目的かは不明だが、部屋に密集した集団が遂に動きを見せた。

彼らは一斉に、

「……綺羅星！」

（本物っ！）

ここが判断基準に設定されているのは、果たして適当なのだろうか。

まあ、確かに寄せ集めの人間には、この一糸乱れぬ「綺羅星！」は厳しいと言わざるをえない。が、おそらく彼女はそこまで考えていないだろう。綺羅星の匂い的なものでも嗅ぎあてたのかもしれない。

それはともかく、タイガーにも現状が呑み込めてきた。遺憾極まりないが、他に選択肢が無さそうなのでやむを得ずではあるにせよ。

（こいつらが、なんでこんなところに?!）

しつこくてすまないが、ここは学校の保健室である。

（まさかわたしを捕まえて、情報を聞き出すとか人質にするとか・
・？）

考えてみると、危機的状況だ。

身構えるタイガー。すると人波が割れ、一人の人物が歩み出てきた。

ベッドの傍らで立ち止まったのは、若い男性。例に漏れず仮面をご着用なさっているので、体型等からの推測なのだが。

その人物は口を開くと、

「綺羅星！」

まずはそれだった。理解しがたいが、彼らにとっては日常的な挨拶なのかもしれない。

「スガタメ・タイガーさん、だね？」

予想通り、男性の声だった。タイガーは、「わたしのこと、知っているのね」と強気に返す。敵に弱みを見せるなど、ありえない。今更のような気もするが。

仮面の男は、彼女のその態度に気分を損ねた様子も無く、再び口を開いた。

「まずはお祝いを言わせてもらおう。おめでとう、実に見事な勝利だった」

「・・・何のこと？」

友好的な口調だったが、無論タイガーは警戒を解かない。

「僕のことは、ヘッドと呼んでくれるかい？ リーダー不在の綺羅星十字団で、暫定的に指揮をしていた者だ」

（えーと、敵の親玉に、名乗られた・・・？）

男の言葉に、タイガーは面食らった。どう考えても偽名だが、敵組織の人間に自己紹介をされるなんて初めての体験だ。

あとついでに、

(コードネーム・・・それとも二つ名？ どちらにしろ、この呼び名って自分で考えてるのかしら？)

そんな余計なことも脳裏を過った。

まだ現実逃避から完全に抜け切れていないようである。仮面の怪しさへの感覚が麻痺してきたせいで気持ちが他に向いたのかもしれない。

「まずは聞いてくれるかな。我々綺羅星十字団は、銀河美少年との戦いに際し、ひとつのルールを決めていてね」

「ルール？ ワコ様をさらおうとしておいて何を。きっと、紳士的とはとても言えないような決まりなんでしょうね」

挑むような顔で、タイガーは言い放つ。会話で表情が使えるというのは、仮面相手で間違いなく勝っている分野だ。

ヘッドと名乗った男は苦笑した。穏やかな物腰は崩れない。

「そう怒らなくてくれたまえ。君たちは知らなくても無理はないが、僕らは、仲間内に関しては礼儀を重んじるのだよ」

ワコ誘拐が独断で行われたことなど知りようがないタイガーは、その言葉を黙って聞いている。それを良いことに、「ともかく」とヘッドが先を続ける。

「先ほど言ったように、綺羅星十字団にはリーダーがない。その座には、銀河美少年のタウバーンを倒した者にこそ相応しい。総会でね、そういうことになったんだ」

「総会……」

やってるんだ、そんなの。さぞかし気味の悪い光景に違いない。

呟かれるタイガーの心の声が、だんだん荒んできている。この状況では余裕なんて持てやしない。

「そう。故に……」

流麗にしゃべっていたヘッドが、ここで言葉を途切れさせる。タイガーは、思わず興味を引かれ、耳を傾けた。そして、その台詞を聞いた。

「今日から君が、僕らのリーダーだ」

.....

「.....は？」

「これからよろしく頼むよ、リーダー」

「.....え、ちょ.....待.....？」

思考回路のみならず、言語体系まで混乱しているタイガー。

そこに、讚えるような口調でヘッドが言葉をつむぐ。

「いや、恋する乙女の方がここまで偉大だとはね。まさかタワーンに見事勝利するとは。こんなことなら、初めから君を誘導しておけば良かったよ」

「何を言っ.....」

タワーンに勝利？

何のことだかわからず、狼狽えるタイガー。そんな彼女に、ヘッドはにこやかに（目は定かではないが、少なくとも口元は笑っていた）問う。

「覚えてないのかい？」

「知らないわよ！」

ベッドから身を乗り出し、タイガーは強く主張する。けれど、ヘッドも折れなかった。

「まったく?」

「当たり前でしょ、なんでわたしがタクトくと戦ったりなんか!」

「そんなことは、考えたことも無い?」

「ええ!」

「夢にも思わない、と?」

「もちろん……夢?」

「そう、夢」

その、『夢』という単語に、タイガーはどこか引つ掛かるものがあった。

(そう言えば……さっきまでそんな夢を……)

見ていた、ような。

島の海岸。灯台が立っていて。白く巨大なサイバディが立っていた。

そういえば全体的な特徴が、皆水の巫女・ワコから聞いた銀河美少年の機体に近かったような気もする。

と、いうことは。

(もしかして、あれがタウバーン?)

その夢の中、自分はその巨人を見上げる事無く同じ目線で見ていた。それはこちらもサイバデイに乗っていたということだ。
そして、戦いが始まり。結果、こちらが

(タウバーンを、倒した……。でもあれは……)

あくまで夢だ。その、はずだ。

でもさっき、このヘッドと名乗った男が聞き捨てなら無いことを言っていないかったか。

「……あの」

タイガーはおずおずと口を開いた。「何かな？」と楽な調子で返すヘッドに、恐る恐る尋ねる。

「誘導って……言った？」

「ああ。うちのイヴローニユの薬品の薰りには、人の意識を緩やかに誘導するようなものもあってね。流石に、意のままとまではいかないから、『洗脳』と呼べるほどのものではないが」

言うヘッドの隣で、仮面の女性が頷いた。その黒髪と体型には、見覚えがある。

(ケイト・・・さ・・・？ ウソ・・・)

いつの間にか仮面を付け、服装も学園の制服から綺羅星仕様になっているが(急いで重ね着したらしく、本来なら素肌を見せているらしき部分から制服の緑色がのぞいていた。微妙に締まらない)。
気を失う前、自分は確かに彼女と話をしていて。

(それで、意識が遠くなって・・・)

とうとうとは・・・

「あの夢は、現実で・・・わたしは本当に、タクトくんに勝った・・・？」

呆然としつつ言葉を溢すタイガーに、ヘッドは頷いた。

「まあ、幻覚が含まれているので全てが現実ではないのだが・・・
タウバーンに勝利した、という点に関しては紛れもない事実だ」
「・・・」

こうなってはもう、タイガーは沈黙するしかない。

「納得してもらえたようだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それは違う、とヘッドに言い返す気力は、呆然としている今のタイガーには無かった。

「では皆、我々の新たなリーダーに敬礼！」

「・・・・」
「綺麗星っ！」
「・・・・」

部屋中の仮面人間が唱和する（本日二度目）。

声と動作が完璧に揃っているのが凄かった。何と云うか、それ自体が必殺技と呼べるのではないだろうか。馬鹿馬鹿しさで人が殺せたら、最強の殺戮兵器たり得たかもしれない。

しかし、この世界においては幸運なことに単なる挨拶。それを聞きながらタイガーは

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ」

卒倒した。

小説などよりよほど奇異な現実を放棄し、夢の世界に逃げ込んだかのようだった。

再度ベッドにその身体が横たわる。意外な展開に、仮面の一団に動揺が広がった。

「り、リーダーが?!」

「お気を確かに!」

想定外の事態に揺れる仮面集団。

実は彼らの方も、圧倒的な数の優位の割に余裕が無い。部屋中でみっちり過ぎて、ヘッドの登場時のように予め動く順番を決めておかないとろくに身動きが取れないのだ。

実は、タイガーが破れかぶれで暴れだしたらそれなりの被害が出ていただろう。

そんな寿司詰め状態が、パニックに更なる拍車をかける。

「団員の中に医者はいないかつ?!」

「そうだ、プロフェッサー・グリーンなら!」

「駄目です、彼女は留守番でここには来ていません!」

「こんな時に一体何を!」

「新リーダーの就任記念パーティーの飾りつけを指揮されています!」

「こんなことになるかわかっていればそんな配置をしなかったものを! ……やむを得ん、119番に……」

むしろタイガーが望むのは、110番の方なのだろうが。

自分の周りで巻き起こっているそんな喧騒のことなど、彼女は知る由もない。

(助けてください、スガタ坊っちゃんまあ・・・)

その悲鳴を声に出すことすら叶わず、タイガーの意識は闇に沈んでいった。

* * *

「・・・?」

タイガーが意識を失った、ちょうどその頃。

彼女の主にして想い人、シンドウ・スガタは壁の時計を見やって小さく漏らした。

「おかしいな、まだ帰ってこないなんて・・・」

それは無論、同い年のメイドのこと。現在卒倒中のスガタメ・タイガーのことである。

けれど彼も流石に、あんなことになっているとは思っても寄らない。帰る途中に何かあったのだろうかと思っている程度だ。

それでもスガタは心配そうに眉根を寄せ、立ち上がった。主人の鑑である。

そこに、もうひとりのメイド(ケモノ耳付き)が駆け込んできた。

「大変です、スガタ坊っちゃま！」

「何かあったのか？」

「ワコ様からお電話です！ タクトくんが、綺羅星との戦いでお怪我をされたと！」

「何だつて?!」

「命に別状は無いとのことですが・・・」

「大変だ、僕らもすぐに行こう！」

「はい！」

実に惜しい。本当に惜しかった。

しかし残念なことに、この非常事態の知らせにスガタの頭から夕イガーのことは吹き飛んで、暫く思い出すことはなかった。

彼女の人生を変えた運命の日は、まだ終わらない。

前編：保健室の悪夢（後書き）

話としては、ここで終わっても良さそうだなー、と思いつつ続きます。次では気多の巫女が自由に活躍してくれる予定ー。アメブロにもアップしたのですが、一番苦労したのは「「「「「綺羅星！」「」」」の色分けでした。無駄にカラフルにしてみました、おもしろそうだったので（笑）。

中編：仮面王国の自由な囚われ人（前書き）

前回の続き。ひよんなことから仮面組織のてっぺんを取っちゃったタイガーさん、綺羅星十字団基地にご招待の巻です。笑いに力を入れてやる、と決意した結果、前回以上に馬鹿馬鹿しい話になりました（笑）。（追記：アニメ本編で巫女の正体は伏せられているという設定が明らかになったのでその部分を修正しました）

中編：仮面王国の自由な囚われ人

「貧血だそうだ。話していたら急に倒れるから、びっくりしたよ」

無駄に本編寄りの台詞。しかしそれを言ったのは眼鏡をかけたニチ・ケイトではなく、仮面をつけたヘッドだった。

(夢なら覚めて。今すぐに……)

タイガーの長い一日はまだ続いていた。

現在の彼女の居場所は、綺羅星十字団のアジト。そして有無を言わず担ぎ込まれた場所が、幹部の集う総会会場だった。

ちなみに、その議題はというと。

「内に秘めた黒さとトラにちなんで、『ブラックタイガー』なんて良いんじゃない？」

「それでは海洋生物になってしまふぞ。そうね、恋のパワーで勝利したんだから『フーテンタイガー』というのはどうかしら」

「あら、それは縁起が悪くない？ いかにも失恋しそうだわ。『マスコドタイガー』は？」

「……そもそも、『タイガー』を入れたら偽名にならないと思うんだけど」

「そうだったわねえ。じゃあ入れるのは『トラ』にしましょうか」

「それなら、グローバルに『J・トラボルタ』」

「『トラトラトラ』とか」

「えー？ それよりむしろ『トランザ・・・』」

聞いていても一般人にはわかりかねるが、要するにタイガーの二つ名を考えているところである。

(ああ、あの偽名ってこうやって決めてたんだ・・・)

当の本人、タイガーは絶賛現実逃避中だった。

先ほどの疑問に解答が示されたのだが、これっぽっちも嬉しくない。

(『これ、いつ終わります？』って聞いたら答えてくれるかしら・・・?)

けれど、敵の本陣でそんな舐めた口がきけるわけもなく。

彼女は、時間が過ぎるのを待つしかなかった。

全員が怪しい格好をしている中、一人だけ真つ当な服装というのは妙に恥ずかしく思える。これまでの人生で築き上げてきた価値観が覆りそうになるのをタイガーは必死に押さえ込んだ。

総会が終わったのは、それより74分後のことだった。

* * *

「お疲れのようだね？」

それはもう、とタイガーだつて言えるものなら言いたかった。でも気力に加えて体力的にもきつかった。無駄に力を使いたくないのだ。

総会がようやくとお開きになって、団員は皆退席。それから暫し濃密な仮面空間から解放されて、タイガーはやっと一息つけた。

空気がおいしい。鉱山内だけど。

ちなみに、散々ぐだぐだな話し合いをした挙げ句、会議の結果は保留となった。徒労にも程がある。

そんな疲れきった彼女に、ヘッドが声をかけた。

「あの幹部の人たち、わたしがリーダーになるのに反対しないの？」

敵ではあるが、その点についてのみ自分と思惑の一致しそうな彼女らについて聞いてみる。しかし、ヘッドは「どうだろうな」と懐疑的な風情に返してきた。

「勝手のわからない者が指導者になってくれた方が、自分たちの好きに動けるとでも思っているのではないかな、彼女らは」

(そういつものなのかしら・・・)

現トップの彼が自分の地位にあまり未練が無さそうなのも、それが理由なのかもしれない。

ぼんやりそんなことを考えるタイガーに、ヘッドは更に詳しく説明を述べている。

「そのくせあの連中ときたら、責任だけは上に押し付けたがるんだよ。『リーダーが良いって言ったからやったまです』なんてことを言った次の日に、今度は独断専行をされたこともあったな。君の昇進について言えば・・・既に敗退した連中は肩身が少し狭いかもしれないがね。そんなのは一人二人だよ」

台詞の前半部分はほとんど愚痴だった。同情気味のタイガーの視線に気付いたのか、ヘッドは咳払いして「それはまあ、ともかく・・・」と話題を変えた。

「済まないが、あとひとり紹介したい子がいてね。ちょっと一緒に来てもらえるかな？」

その言葉に、タイガーはのろのろと頷く。自分が組織のリーダーらしいが、身の安全が保証されているとはとても思えない。逆らう気にはなれなかった。

椅子から立ち上がり、重い足取りでヘッドの後についていく。さほど歩くこともなく、二人は目的の部屋へとついた。

「ここは、僕が私室として使っていた部屋だね。入りたまえ」
「……………失礼します」

メイドの性が、こんな時でも口をついて出たのは挨拶だった。返事を期待してたわけではないのだが。
けれど、「どうぞー」と返ってきた。それも、少女の声で。

「入るよ、サカナちゃん」

ヘッドが室内の誰かにそう声をかける。
そういえば、誰かを紹介したいと言っていたっけ、とタイガーは今更ながらに思った（奇妙な呼び名には、総会の前に聞いた幹部達のぶつとんだ名前のせいで無反応だった）。
そんなことを思い出しつつとりあえず入室した彼女は、久しぶりに素顔のままの人間を見た。

部屋の中にいた長い髪の少女は、おかしな仮面も珍妙な衣装も身につけてはいなかった。
彼女は、ドーム状の天井の、鳥かごのような檻の中に座り込んでいる。綺羅星十字団のメンバーでなく、捕虜のようだ。

（組織の秘密を知ってしまった一般人？ それとも…………）

少女の正体を推測するタイガーに、ヘッドが説明する。

「彼女は・・・そうだな、名前よりも『気多の巫女』と言った方が君にはわかりやすいだろう」

「気多さま?!」

タイガーは驚いて口をあぐりと開けた。

気多の巫女。それは、ワコと同じ四方の巫女の一人である。

「気多の封印が解かれたことは知っていましたが、綺羅星に囚われていたなんて！」

気多の巫女が閉じ込められた檻に向かって、タイガーは、思わず一歩踏み出す。
すると。

「危ないっ」

「・・・わっ」

何かに足をとられ、タイガーはよろける。

視線を足元へやると、床を横切っている鎖が目飛び込んできた。その鎖は、真っ直ぐ少女のところへ延びている。

(綺羅星の奴ら、酷い仕打ちを……)

タイガーが、怒りに歯を食いしばる。そこで、彼女に話しかける者があつた。

「ごめんね、すぐ片付けるから」

その声の主は、ヘッドではなく。
檻の中の気多の巫女、その人である。

「え？」

タイガーの目の前、床で自由に曲線を描いていた鎖が、じゃらじやらと部屋の奥へと引き込まれていく。
タイガーがその方向を見ると、気多の巫女が鎖を手繰りよせていた。床の鎖はみるみる無くなっていき、

「よし、終わり」

「あ……あれ？」

その全てが気多の巫女の手元に集まつた。
それが意味することは

「……あの、その鎖ってどこにも繋がれてないんですか……？」

年齢は同じくらいだが、相手が巫女ということで敬語になるタイガー。

気多の巫女は、何を当たり前のことを、と言いたそうな顔をする。彼女の代わりに答えたのは、ヘッドだった。

「見ての通りだ」

「だって繋がってたら、動きにくいじゃない？」

本人も、付け加える。

初めから付けないでください。

と言いたい気持ちは、どうにか堪えるタイガー。

どうやらあの鎖、身動きをとれなくするためのものではないらしい。それならば、仕方ない。そういう風に自身を納得させることにした。

この一日で、自分はとても我慢強くなったと少女は思う。

タイガーは言葉を選んで話しかけた。

「その鎖は……えっと……どういうものなんですか？」
「え？」

曖昧過ぎて言いたいことが伝わらなかったようだ。タイガーは、
少し考えて言い直す。

「目的……というか、意図、と言いますか……」
「決まってるじゃない。お洒落よ」

……左様で御座いますか。

「だって立場を考えると、あんまり派手に着飾るわけにいかないじゃない？」

(囚われてる自覚はあるのに、お洒落は諦めないんだ……)

撃沈するタイガーをよそに、「女の子は、どんな状況でも身だしなみに気を遣うんだね」とヘッドは笑って言う。おしゃまな女の子を微笑ましく思っているかのような口調だった。

上から見ているとも取れる言い方ではあったが、気多の巫女はそう思わなかったらしい。自慢気に胸をはった。

「東京ではね、チエーンが今一番イケてるファッションアイテムなんだって！」

「だ……誰がそんなことを……」

悪いのは彼女ではない。情報が限られてしまうこの状況だ。つまりは、この純真無垢な少女を監禁している綺羅星だ。

自分に言い聞かせながら、タイガーが尋ねる。彼女の内面など知る由もない気多の巫女は、無邪気に答える。

「海岸に打ち上げられてたカバンを拾ったら、ファッション雑誌の切り抜きっぽい写真が入ってたの！　そこにね、『今大ブーム』って書いてあった！」

（……………四方の巫女って……………海岸で拾った物に心を惹かれるのかしら……………）

そんなことも考える一方、タイガーの脳裏には、皆水の巫女と銀河美少年が過っている。

（スガタ坊っちゃんも海岸で拾われていれば、婚約話が順調に行っただのかも……………）

まあ、そこに至る前段階が想像できないが。

そして、その切り抜きが最近のものとは限らないわけで。その『今』という単語の信憑性は微妙だ。

本日幾度目かの現実逃避に入るタイガーに気付いたのか、「ちょっといいかい？」とヘッドが口を挟んだ。

「話はずんでいて何よりだが、聞いてくれるかな？」
「なに？」

小首を傾げる気多の巫女。

その仕草には、恐怖どころか緊張感すら無かった。捕虜のイメージがガラガラと崩れていく。

呆然としているタイガーの肩に、ヘッドが手を置いた。

「こちらの彼女がね、僕たち綺羅星十字団のリーダーになったんだ。それを言いにきたんだよ」

「そうなんだあ。すごい」

何故か賞賛を込めて言う気多の巫女。彼女は檻の格子を両手でしっかりと握ると、

「よいしょっ」

前に体重をかける。半球型をした檻は彼女の勢いに押され、前にごろんと倒れた。

気多の巫女は立ち上がると格子を踏みしめつつ歩く。檻は回転し、中の彼女諸共こちらに近付いてくる。

ハムスターが中に入って回すホイールを巨大にして、人間が入り、床に置いて転がす。そんな感じの絵面だ。

それにしても。

(何か、自由だなあ……)

ドアの幅からすると、部屋の外には出られなさそうだが……檻と鎖を物ともせずこんなに動けるものなのか。

感心してしまうタイガーのそばまで来ると、気多の巫女は格子の隙間から腕を伸ばし、タイガーの手を取った。

「おめでとう、リーダーさんっ」

気多の巫女に両手をぶんぶん振られ、ここでようやくタイガーは我に返った。

「いや、違いますから!」

「え、違うの?」

「違います!」

抵抗しても勝ち目が無さそうだから大人しくしていただけで、断じてタイガーはリーダー就任の件を了承したわけではない。

気多の巫女はヘッドにいぶかしげな視線を向ける。それを受けて、仮面の青年は口を開いた。

「しかし君は、タウバーンに勝った」

穏やかで言い聞かせるかのような口調が余計に腹立たしく、タイガーは懸命に「そんなこと知らない」と言いつのる。ここで引くわけにはいかない。

必死に考えていた彼女は、ここで突破口を見い出した。

「そうよ、そもそもわたしは、団員じゃないわ！ だから、あなた達のルールなんてそんなの・・・」

「いや、君は我々の同志だ」

「へ？」

タイガーの主張を、自信に満ちたヘッドの言葉が遮る。

「本日付の、団員名簿だ」

部屋に置かれていたノートパソコンを持ってきて、タイガーに画面を見せる。そこに表示されていたリストの一番下には、確かにタイガーの名前が記されていた。

タイガーは愕然とする。全く身に覚えの無いことだ。

彼女の様子に、ヘッドが優しく語りかける。

「驚くのも無理はない。実は、君をサイバディに乗せるために使った備品・・・電気枢、というんだがね、あれはとても貴重なものなんだ。これのセキュリティレベルは最上位に位置していて、団員以外の人間には使用許可がないんだよ」

「そっか。それを使わせるために、作戦前にこの子を入団させたのね？」

気多の巫女の言葉にヘッドが「そうなんだ」と首肯する。

「ちょっと、そんな簡単に入れるものなの、この組織って?!」

勝手な理屈に、タイガーが爆発した。ヘッドはここで初めて気押しされる。

「うちは秘密組織だから、履歴書を出せと言うわけにもいかないし・・・面接で通ればそれで採用なんだよ」

「わたしがいつ面接したって言うの?! ずっと寝てたっていうのに!」

「面接官の資格を持つのは、隊の代表だ。記録によると、君を担当したのは・・・イヴローニユ、だな」

ノートパソコンのデータを確認して言うヘッド。

その名前は、確か保健室で聞いたもので・・・

「その人って、わたしを連れてきた・・・二チ・ケイトさん？」
「ああ、そうだ」

タイガーの問いに、ヘッドは頷く。履歴書の提出義務は無くとも、幹部クラスの本名は把握しているらしい。

それは良い。そんなことより、イヴローニユ　二チ・ケイトはタイガーを利用する計画を立てた当人だ。面接を通らない方がおかしい。

「それ、試験の意味を為していないんじゃない？」

「いやしかし、書類は所定の形式をちゃんと満たしていたのでね・・・」

「それで、オツケー出しちゃったんだ？」

仮面の下で困った顔をしているだろうヘッドに、お気楽に気多の巫女が言い放った。

「いや、うちは匿名性を最大限重んじるという性質上、あまり個人の行動に踏み込むわけにも・・・」

ヘッドは歯切れ悪くモゴモゴと言い訳して、結局「まあ、その辺りは新リーダーに改革してもらおうじゃないか」とその話を切り上げた。

その様子を見て、気多の巫女はやれやれ、という表情を浮かべた。フオローしようと思ってか、

「ま、匿名性はこの組織最大のウリだものね。各隊ごとに更衣室設置してるくらいだし。洗濯機と乾燥機も完備とか、力入れてるわよね」

と後を引き継ぐ。

その台詞の中で、匿名性云々よりもタイガーが気になったのは、

「更衣室・・・有るんですか？ ここって」

「ええ。この部屋の近くにもひとつ」

「この格好で自宅からここまで来るのは、難しいからね」

ヘッドが実感を込めて言う。

「綺羅星十字団の存在は広く知られていないとは言え、誰かに見られたら通報されてしまうだろう？」

わかってるなら、もうちょっと、服のデザインをどうにかしろ。

敵相手なので、心の中では敬語抜きのタイガー。そこに、

「なら、大人しめの制服にしたら？」

気多の巫女から援護が来た。

しかしヘッドは首を横に振る。

「いや、この格好・・・特に仮面は、作戦の進行を左右するのでね。変えるわけにはいかないんだ」

(あのおかしな仮面に、何か秘密が?!)

緊張するタイガー！

敵の内部情報が掴めるのでは。そんな期待が顔に出ないよう、意識を向ける。

彼女は、ヘッドが再び口を開くのをじっと待つ。その時は、程無く訪れた。

「この仮面をつけると、皆、気が大きくなってね。行動力が明らかに増すのだよ。作戦の幅が広がるんだ」

「ああ。更衣室に向かう足音より、出てきてからの足音の方が明らかに元気だもんね」

この部屋から出られない気多の巫女にわかるということとは、件の更衣室は、本当にこの近くに位置しているようだ。

「それに確かに、巫女は敬えー、とかそういう島の風習とか常識に
囚われなくなるっていうのはあるかも」

（あと、羞恥心とか）

皮肉抜きの口調で言う気多の巫女に、心の中でタイガーが言い足
す。無言の彼女をどう解釈したのか、ヘッドが更に説明を加えた。

「大抵、初めはつけるの躊躇するのだが・・・周りが皆この格好だ
と普通の格好の方がむしろ恥ずかしくなってくるみたいだね」

（何かそれ・・・理解できちゃう自分が嫌・・・）

先の総会での感覚を思い出して、タイガーは思わず項垂れた。
そんな彼女に構わず、気多の巫女とヘッドはまだ会話を続けてい
る。まるで話の合う友人のようだ。

「あと、実際やってみるとクセになるんだって？ この『綺羅星！
って』

「いや、サカナちゃん。指をもつと開いて・・・こう、綺羅星！
と」

「綺羅星！・・・こんな感じ？」

「そうそう。すごく良くなったよ、サカナちゃん」

（見てない見てない、わたしは何も見えていない！）

タイガーは、あげようとしていた顔を急制動で停止させた。

囚われの巫女が、敵組織の挨拶の作法を、首魁自らに指導しても

らっている。

そんな光景を見た日には、自分の常識まで破壊されて「綺羅星！」とかやり出しかねない。

それは嫌だ。タイガーは、石になろうと決めた。全てにひたすら耐えて、嵐が過ぎ去るのを待とう、と。

その彼女の努力は報われ、やっと「もう遅いから帰ったほうがいいな」と解放される運びとなつて。

そこで、タイガーはひとつのことに気付いた。

「わたし……リーダーになるって話、結局、断れてない……」

そんなわけで、彼女が眠れない夜を過ごすことが決定した。

つづく

中編：仮面王国の自由な囚われ人（後書き）

綺羅星の組織内部については適当に書いてるだけなので、本編とは無関係です。そして、サカナちゃんがとても自由な人になってしまいました（笑）。次の話で終わりです。そちらは演劇部が全員集合です。ちゃんと生きてるタクト君も登場します！。

後編・天に星、地にトラ（前書き）

長い長い馬鹿話、これにて完結です。ここまでくると後はオチと
いうか、まとめるだけです。まとまってこれか、みたいな結果にな
ってしまいました（笑）。まあ、元々パラレルなので好きにやっ
てしまいました。

後編：天に星、地にトラ

一部の人間にとっては嵐のような夜が開けて、翌朝。

「おはよー」

ツナシ・タクトは両腕の松葉杖で身体を支えながら校門前に現れた。折れた片足に巻かれた包帯が痛々しい。

顔色は流石に良くはないが、目に見えて気落ちしているというほどでもなかった。

「怪我、やっぱり痛む・・・？」

「ちゃんと眠れたか？」

ワコとスガタが心配そうに声をかける。ジャガーと、それにタイガーも二人についてこの場にいる。

タクトとは別の意味で、重い足を引きずるようにしてここまで来たタイガーは、意を決して少年に話しかける。

「タクトくん、あの・・・」

「ん？」

「ごめんなさい・・・。わたし、その・・・昨日・・・」

怪我を負わせた張本人のタイガーは、罪悪感が上乘せられて余計に胸が痛む。ちゃんと説明しようと思えば朝には既に決めていたのだが、どうしたって言いづらい。

そうしてタイガーが口ごもっているうち、タクトは彼女の辛そうな顔を話の途中で判断し、履き違えた。

「仕方ないって。落とした携帯探してたから帰るのが遅くなって、連絡もつかなかったんだろ？ 見つかった良かったあ、これ以上悪いことが続いたらたまらないよ」

「……いえ、その……」

タイガーが屋敷に戻った時、スガタもジャガーもタクト負傷の知らせを受けて出かけていて、放課後タイガーに何が起こったのかわからない。

皆慌てていて問いつめられることもなく、タイガーの苦し紛れの言い訳を信じた。

でも、このままでは駄目だ。本当のことを言って……あの組織から助けてほしい。

虫の良い話だとは思いますが、タイガー一人の力ではこの事態を解決できそうにないのだ。

(……よし！)

覚悟を決め、タイガーが口を開きかけたその時、

「大変よ、みんな！」

「部長？」

「おはようございます、どうしたんです？ 一体」

「情報を掴んだの！ 綺羅星に、新リーダーが就任したんだって！」

「ぐ」

言いかけた台詞（一晚徹夜で考えて決めたものだ）を喉に詰まらせるタイガー。

彼女がそこで青くなっていく間にも、話は進んでいく。

「その新リーダー、それまでは綺羅星内部でも無名だったのに、タバーンを倒して組織をあつという間に支配下に置いた凄腕らしいわ。幹部全員が満場一致で認めるほどの大物だそうよ」

「タクトくんに勝った人？」

「今後の戦いは、厳しくなるな・・・」

「ぐぐ」

「でも、負けるわけにはいかないわ。その新リーダーの正体はまだ不明だけど、皆で力を合わせて、タクトくんの仇を討つのよ！」

「もちろんです！」

「ぐぐぐ・・・」

「僕だって、次は絶対に負けないさ。必ずリベンジしてやる！」

「・・・・・・」

もしかして、皆さんわかってやってます？ わたしが口を割るよう仕向けてたりします？

演劇部一同が沸き立つほど、タイガーは自分の寿命が削られていくように感じる。

自分のしたことは既に皆の知るところなのではないかと思うと、汗が滲むのを止められない。

「あれタイガー、すごい汗。大丈夫？」

「なななな何でもないので！ ほら、今日暑いじゃない？」

「あー、そうだよー。僕もギプスが蒸してさー」

「うう……」

ゴメンナサイゴメンナサイ。こんなことになるとは思ってなかったんです、夢だと思ってたんです……

タクトの顔は、今のタイガーには直視できなかつた。

それは決して、銀河の名を冠されるほどの美少年相手に恥じらっているからではない。

(言えない……もう言い出せる空気じゃない……)

終わった。

ひどく端的な単語がタイガーの心にずん、と落ちる。

「ま、でもとりあえず学校よ。行きましよ、遅刻しちゃう」

部長の言葉に従い、歩き出す6人。

歩くのが大変なタクトをスガタが手伝い、ワコは皆の分のカバンを持つ。

「それくらいなら私が・・・」

タイガーが申し出るが、スガタが「いや、同じクラスの僕らがやるよ」とそれを止める。

去っていく同級生3人の背中を茫然と見つめるタイガー。

徹夜明けのくらくらする頭で、彼女は懸命に考えを巡らせた。

(こつなったら逆転の発想よ！ わたしのリーダーとしての行動に、綺羅星の動きがかかってくる。これってすごいことじゃない！)

敵の組織を思うままに操れば、戦いは優位に運ぶ。そこに賭ければ、事態は好転させられるのでは。

タイガーはその線で具体策を考える。

(解散しちゃうのは・・・ダメだ、隊が員が独立して別の組織を立ち上げるかも)

綺羅星十字団には複数の隊があり、それぞれに代表が率いている。それがバラバラに分離し、好き勝手するようになるだけ、という可能性もある。

（本家綺羅星十字団とか、新生綺羅星十字団とか、NEO 綺羅星十字団とか・・・うわ、そんなことになったら余計面倒ね）

では、彼らの力を無駄に使わせるといのはどうだろう。

（「この廃坑には、まだ眠っている鉱脈が有る。皆でそれを探し、組織の資金源とするのだ！」とか適当な方便で、ひたすら穴を掘らせる・・・なんていうのは？ 少しは時間稼ぎにもなるし、力だつて削げるかも）

けれど、少し気がかりもある。

（でも、それを信じて一生懸命になってくれるほど、まだわたしは信用されてないわよね・・・）

何しろタイガーは昨日までは、宿敵銀河美少年の側にいた人間だ。しかし、諦めるわけにはいかない。彼女のその一念が実ってか、また別の案が浮かんできた。

(待って・・・不信を使った別の手はどう？ リーダーの座を狙って争ってただから、各隊はそんなに仲は良くないはず。けしかけて同士討ちが始まれば、組織を内側から崩せない？)

しかし、それにも難点が。

(あー・・・争いの元だった、銀河美少年を誰が倒すかの競争って、わたしのせいで終わっちゃったんだ・・・)

またも挫折。このままでは駄目だ、とタイガーはやり方を変えることにした。

きっかけすら思い浮かばないが、せめて起点くらいははっきりさせておこう。

相手は、頭数も多く組織立っている。どういつ手段をとるにせよ、まず前提として。

(わたし独りでも、始められそうなことを挙げないといけないのよね・・・)

考え込むタイガー。

しばらくして、彼女がたどり着いた答え。それは

（そう、更衣室！ あの部屋が全部使えなくなったら、綺羅星は身動きがとれなくなるわ！ しかも衣装の洗濯にも支障が出る！）

ここは南の島。服は小まめに洗わなければ、相当匂うことだろう。そんな状態では、集団行動に支障が出ること受け合いだ。

（我ながら名案よ！）

と、一瞬得意気になったタイガーだったが、その高揚は儂く萎んでいく。

置かれている状況等のせいで、現在の彼女はやや情緒不安定だった。

（ああ、なんでわたしがそんなしょうもないことを……。そもそもなんだってこんな目に……。）

言い様の無い切なさを覚えるタイガー。

そこに、ジャガーがこそこそと耳打ちしてきた。

「ね、タイガー」

「な・・・何？」

そう言えばずいぶん考え込んでしまっていたようだ。松葉杖で歩

いているタクトらとの間にはかなりの距離ができ、既に自分の教室へ行ったのだろう部長は、既にいなくなっていた。

（ば……バレた？ 出ちゃいけないこと口に出してた？）

一人で考えているつもりで、妄想がただ漏れになっている知人を持つ身だけに、その不味さはよくわかる。心臓がばくばく鳴るのを感じながら、タイガーは同僚の言葉を待った。

「ちょっと気になったんだけど……」

「……何……？」

神さま巫女さまお星さま、どうかお助けください。

切に祈るタイガーに、ジャガーはこう囁いた。

「あの光景、グーじゃない？」

「……はい？」

言っている意味がわからず、タイガーは間抜け面でジャガーの指す先を見る。

そこにいたのは、二人の美少年。ワコは歩く邪魔にならないよう少し離れており、そのためタクトがスガタに凭れかかっている様が

一切の障害物無く臨めた。

(見えなくも・・・いや、見える・・・)

ジャガーの熱意と睡眠不足の化学反応故か、そんな気になってしまおうタイガー。

それは、彼女の中の何かにヒビを入れた。

(・・・ワコ様なら、まだ納得できた。でも、これは無い。有り得ないでしょう!?)

この叫びが届いていたら、きっとスガタもタクトも無条件で賛同してくれたことだろう。

けれど人間には、他人の思念を読み取る能力は備わってはいない。それは、銀河美少年であろうと、『王』のサイバデイのスタードライバーであろうと、同じことだった。

(ツナシ・タクト・・・あなたが・・・!)

衝動、としか言いようの無い理不尽な力が、タイガーの思考を支配していく。

思い込みと、睡眠不足と、先日の体験で彼女が『常識』に負ったダメージ。その三つが、彼女の精神に揺さぶりをかける。

その結果、タイガーを踏み止まらせていた、何か。それが、ぱり

ーん、と鋭い音をたてて割れた。

一方、同僚の精神世界を塗り替えるのに無自覚に一役買っていたジャガーはジャガーで、まだ己の妄想の世界にトリップ中だった。

「良いわあ……あの手の光景って、中毒性があるわよねえ……。不謹慎だとわかっていても、さらなる絡みを期待しちゃっ」

「……毒……さら……毒を食らわば、皿まで……」

どこか虚ろに呟くタイガー。後半など会話の内容だけでは意味不明である。しかしノリノリのジャガーが気付くことはない。

「これをきっかけに二人に思いがけず新しい展開が巻き起こったりとか！」

「思いがけず……これをきっかけ……」

そら恐ろしい調子で繰り返して、タイガーは薄く笑った。
スタガメ・タイガーは、こうして

* * *

「綺羅星！」

「「「「「綺羅星！」「「「「」

綺羅星十字団員が総出で見守る中、新リーダーが壇上上がる。
仮面で顔は隠されているが、年若い少女であることが見てとれる。
少女は堂々と聴衆に呼びかけた。

「タウバーンは、このわたしが破壊した！　しかし、銀河美少年は
まだ我々綺羅星十字団に齒向かう気ている！」

その様子からは、露ほどの迷いも見い出せない。『我々』と言う
時にさえも。

「ここで手を止めてはならない！　奴に我々のおそろしさを思い知
らせ、跪かせるのだ！　二度と逆らう気など起こさぬように！　良
いな諸君！」

「「「「「綺羅星！」「「「「

皆の士気が目に見えて高まる。新リーダーは、それに十分な資質
の持ち主のようだった。

少し離れた場所からその様子をつるんで見ているのは、各隊の代
表たち。

「新リーダー、結構ノリノリじゃない。大したものね、恋する乙女
っていいのは」

想い人が同じだからか、そのスカーレットキスの言葉には棘がない。わずかなりとも、親近感を抱いているのだろうか。

「きっと、メイドみたいに人に仕える仕事って、色々ストレス溜まるのよ」

それを受け、頭取が軽く言う。その後ろでは、セクレタリーが何度も頷いていた。上司に調子を合わせて同意している、という感じではなく、心底同調している風だ。

「そんなつもりじゃないのに巻き込んでしまって、どうしようかと思っただけど・・・意外と上手くやっていけそうね。良かったわ」

安堵の感情が見てとれる、イヴローニユ。彼女が感情を表に出すのは珍しい。本気で悪いと思っていたようである。

彼女の計算の結果で無いのであれば、この事態は本当に、誰一人として望まない結末だったということだ。新リーダーが吹っ切れていなければ、本当に救いようが無かっただろう。

とはいえこれはワーストエンドで無いだけで、ハッピーエンドかと問われれば、大抵の人間は答えに窮するだろうが。

「中止になったと思ったが、就任パーティーはできそうだな。準備

した甲斐があったというものだ」

この上なく個人的な都合のようだが、プロフェッサー・グリーンもこの事態には好意的なようだった。

どうやら意外にも、幹部クラスで新リーダーの台頭を苦々しく思う者はいないらしい。もしかしたらこれは、順風満帆というべき状況なのかもしれないかった。

その間に、壇上の新リーダー　スガタメ・タイガーは演説を終え、こつこつ締めくくっていた。

「以上をもって、わたし『トラバーユ』の就任の挨拶とさせてもらう！　綺羅星十字団に栄光を！　綺羅星っ！」

「……………綺羅星！……………」

こつこつして呼び名も決まり、一人の恋する乙女の新しい生活が始まった。

明確な障害はとりあえず無さそうなこの状況。吹っ切れてしまったスガタメ・タイガー改めトラバーユに待っているのは……………けこつこつ幸せな未来かもしれない。

青春を謳歌にも、イロイロな形があるということだろう。

終わり

後編：天に星、地にトラ（後書き）

タイガーさんを不幸にしたくなかったのでこんな終わりに。タクト君も、新機体・スーパータウバーンだかタウバーンクアンタだかの獲得イベントを経て二週後くらいに戦線復帰するイメージがぼんやり有ります。ブログには後書きっぽいものを書く予定ですが、話としては完結なので投稿はしないつもりです。これ以上長くしてどーするよ、って思ったので（笑）。そういうわけで、とても長くありませんでしたがここで終わりになります。読んでくださった方、ありがとうございましたー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8814o/>

こうして彼女はとらば一ゆに至った

2011年10月8日03時48分発行